グループ名	ユニット名等	科　　目　　名	担当教員名	対象学年次	学期
現代社会	2 単位 現代日本	日本の社会	友岡　邦之	2 年次	春

授業のキーワード	社会学，メディア・コミュニケーション，現代文化
授業の概要・目的及び修得させる知識・技能	本講義では、社会学の基本概念を用いて現代日本の諸問題の分析・解釈を試みる。対象としては、日本社会の歴史的背景から地域社会が抱える課題、身近な小集団の特性、サブカルチャーの現状に至るまで、幅広い題材をとりあげる予定である。
履修のアドバイス・前提科目等	あたりまえのようにみえることを批判的に捉えること、一つの問題を複数の視点から捉えることを心がけて受講してほしい。

授 業 展 開

	テーマ	内　　容		テーマ	内　　容
第1講	近代化と社会学の射程	エミール・デュルケームの学説を中心に社会学の問題意識を概説し、現代日本社会の分析における社会学的発想の有効性について考える。	第9講	文化帝国主義と大衆文化批判	文化的商品が大量に生産され、グローバルなレベルで流通している状況は、どのように論じられてきたのか。シラー、アドルノ、ベンヤミン等の議論を紹介し、その有効性について考える。
第2講	近代化における宗教倫理と資本主義の重要性	マックス・ウェーバーとカール・マルクスの学説を紹介しつつ、現代社会を支える資本主義的経済原理の根本的な意味と、社会現象を説明する際の両者の立場の違いを説明する。	第10講	公共性の構造転換と文化の消費	フランクフルト学派の視点、特にユルゲン・ハーバマスの議論を紹介し、現代の公共圏におけるマスメディアの役割や、文化消費のあり方について考える。
第3講	都市化と村落共同体の現在	テンニースやマッキーバーらの集団類型論、およびシカゴ学派の都市社会学を紹介しつつ、現代日本の地方における生活のあり方を振り返る。	第11講	テクストの記号論的分析	カルチュラル・スタディーズ、特にジョン・フィスクのポピュラー文化研究を紹介し、その分析枠組の有効性について、現代のサブカルチャーの事例を踏まえて検討する。
第4講	集団所属と価値判断	R.K.マートン、H.S.ベッカー、D.リースマンらの学説を踏まえ、自分が所属している集団が自分の価値観や判断基準に与える影響について考える。	第12講	ネット時代のコミュニケーション	マーシャル・マクルーハンの議論を踏まえ、情報通信技術の発達がもたらしたコミュニケーション環境の変化を理解する。
第5講	「社会現象」を説明するためのさまざまな視点	ジンメルの形式社会学の議論を出発点に、ウェーバーの理解社会学、デュルケームの社会学的機能主義等の諸学説の方法論的相違を説明し、パーソンズの社会システム論とミクロ社会学の対立の背景を理解する。	第13講	コンテンツ生産の行方	動画配信サイト等にみられる文化的コンテンツの生産と享受における近年の傾向について、ロバート・パットナムやゲイリー・ベッカーらの社会関係論の観点から検討を行う。
第6講	現象学的社会学とは	フッサール、シュッツ、バーガー＝ルックマンの学説を紹介し、日常の生活世界を理解する際の現象学的社会学の有効性について考える。	第14講	サイト・スペシフィックな文化享受の現在	地域社会に根ざした芸術活動や音楽フェスティバルの開催が活発になっている近年の傾向について、リチャード・フロリダの創造的階級論等を踏まえて都市計画論的な観点から分析を行う。
第7講	コミュニケーションにおける社会性	マートン、ゴッフマン、ベッカーらの学説を踏まえ、日頃何気なく遂行している役割行為を批判的に捉えてみる。	第15講	試験	
第8講	大衆と消費、文化と平等	「消費社会」とも呼ばれる現代において、大衆はどのように文化を受容するようになったのか。この問題を、ヴェブレン、ボードリヤール、ブルデュー、リッツァらの学説を踏まえて考える。	評　価　方　法		毎回の講義後に提出するリアクション・ペーパー（40%）と論述試験（60%）で評価する。
備　考 （関連する資格・試験等）					

使用する教科書（必ず購入してください）	参　考　文　献
教科書・参考文献は特に指定しないが、社会学のテキストあるいは事典を購入し、予習・復習を自ら進めることが望ましい。	